



■井上ひさし(小説家、戯曲家、放送作家)の『本の運命』(文春文庫)を最近読みました。その中に、言葉の大切さ、本の大切さや「本の読み方十箇条」などが書かれていました。大変面白く参考になるので、校長だより第5号、6号で紹介したいと思います。長くなりますが以下、『本の運命』(頁138)より。



なぜ本であり、言葉なのか。認知科学者たちの語るところでは、「基礎色彩語」は言語ごとにそれぞれ様々であるらしい。哲学者の管野盾樹さん(大阪大学)のお説を拝借しながらもっと詳しく言いますと、私たちは色彩の連続体の中で生きており、当然のことですが、この連続体には切れ目というものがない。

もともと切れ目のない連続体の中で生きて行くことはとても不便で疲れるし、もともとそんなことは無理ですから、私たちは、その連続体に、いくつか切れ目を入れる。集中点を設ける。中心点を設定する。その切れ目、集中点、中心点となる色を基礎色彩語と称するのだそうです。

つまり、私たちは、「切れ目のない連続体=混沌とした無秩序」の中に、「ことば=基礎色彩語」を持ち込むことで、自分の周りを整理し、生きていきやすいように世界を手馴づけるわけですね。

ところで、その基礎色彩語ですが、どんなズボラな言語でも、最低、白黒の区別はつける。色彩連続体を白と黒の二色で文節して秩序づけるわけです。

さらに、基礎色彩語を三つ持つ言語であれば、三つ目はきまって赤になる。そういう言語では、白と黒と赤の三色を駆使して世界を整理するのです。以下、基礎色彩語を四つ持つ言語なら、四つ目は黄色か翠(みどり)のどちらかであり、五つ持つ言語であれば、その五つ目はかならず青である。六つ持つ言語であれば、六つ目はきっと茶色。七つ持つ言語なら七つ目は、桃色、紫色、橙色、灰色のうちのどれかひとつ、ということになるらしい。

この例でよく分かるように言葉を会得するということは、自分の周囲にふつつつと沸き立っている無数にして無限の、無秩序な連続体に、言葉で切れ目を入れるということなのです。切れ目を入れることで世界を整理整頓し、世界を解釈するわけですね。このように言葉なしでは世界に立ち向かうことができない。だから言葉が、書物が大切なんです。

■ところで、皆さん、『東ロボくん』って知っていますか? 国立情報学研究所の新井紀子教授が中心となり「ロボットを東大に合格させる」ことを目標に研究・開発が進められている人工知能(AI)の名称です。平成27年6月の「総合学力マーク模試」では、偏差値57.8の成績だったそうですが、目標の「平成28年11月に東大合格」は実現不可能ということで断念し、今後は記述式試験を解くための研究などに集中するとのこと。東ロボくんは、蓄積した知識や論理を扱う科目は得意ですが、英語や国語など「読解力」を必要とする科目は苦手のように。

また、新井教授は、「東ロボくんの性能向上よりも、中高生の読解力向上が直近の課題」とし、研究過程で明らかになった中高生の読解力について警鐘を鳴らしています。

例えば、次ぎの問題は、全国約1000人の中高生のうち約3割は誤答だったそうです。

仏教は東南アジア、東アジアに、キリスト教はヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアに、イスラム教は、北アフリカ、西アジア、中央アジア、東南アジアにおもに広がっている。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

オセアニアに広がっているのは()である。

- ①ヒンドゥー教 ②キリスト教 ③イスラム教 ④仏教 正解②

日本では昔から勉強の基礎・基本として「読み、書き、そろばん」といいますが、藤原正彦(数学者、作家)は、「特に『読み』が一番大切であり、『読み、書き、そろばん』は、7対2対1の割合である。」といった内容のことを本に書いています。読解力がなければ、数学やその他の勉強もできないからです。その『読解力』を養う方法は、読書しかありません。沢山本を読んで読解力を身に付ける必要があります。井上ひさしの「本の読み方十箇条」は、次号で紹介します。